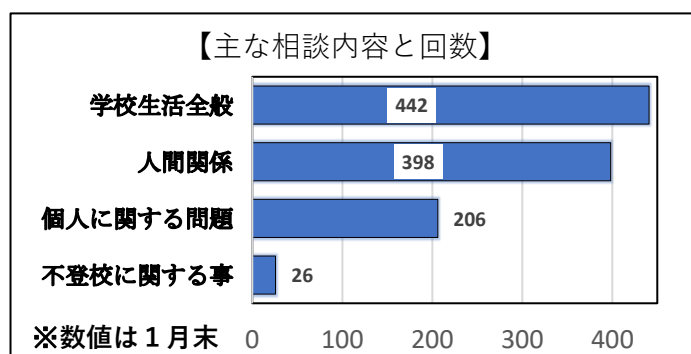




今年度の学校訪問相談活動を振り返って



令和 6 年度の学校訪問相談活動ありがとうございました。今年度の相談活動の概要についてお知らせします。1 月末現在の相談回数は 1,170 回ありました。（児童 91.2% 教職員 3.9% 保護者 4.9%）相談内容



としては、学校生活全般、人間関係の割合が高く、男女別では、女子の相談が全体の 62% でした。学年別では、低学年 25%、中学年 37%、高学年 38% でした。月別では、10 月、11 月、6 月の順に多くなっていました。

先日、「日本人は相談するのが苦手である」という精神医学者の指摘を目に

しました。相談できない理由としては、「相談する勇気がない」「話すと余計辛くなる」「自分で解決しなくてはいけない」「どうせ解決しない」「相手から否定されるんじゃないか」「心配をかけたくない」などの理由があるようです。

学校では定期的に生活アンケートや教育相談を行います。これらにも同じことが当てはまるかもしれません。子どもたちの「元気です」「大丈夫です」「何もありません」という声を聴くと安心しますが、なかなか言葉にできない気持ちを聴きとることが学校訪問相談活動の中で一番大切なことだと考えています。本当の気持ちを少しでも聴くために、効果的な学校訪問相談になるよう今年度も訪問校と相談して、取組を行いました。下に二つの取組を紹介します。

【学校訪問カウンセラーによる相談活動の説明】

昼休みの前半に時間を取り、カウンセラーが児童に相談の意味や良さを説明しました。カウンセラーの名前や顔を覚え、身近な存在であることを感じてもらい、来室につながることができました。

【カウンセリング体験の実施】

今年度は、14 校で実施しました。全学年または要望のあった学年児童を対象に、一人ずつ体験してもらいました。カウンセリングの機会を意図的に設定することで、これまでアンケートに書けなかったことや、保護者、教職員、友達など、誰にも話せなかった話を数多く聴きました。



次年度も、子どもたちに寄り添い、学校を側面から支援できるように、学校訪問相談の充実を目指していきたいと考えます。どうぞ、よろしくお願いします。

（担当 学校訪問相談部長 宮澤忠明）

「所報」は、教育センターのホームページでも公開しています。ご覧ください。



上越市の「就学相談」について

＜通常学級の担任の先生、市の事業「就学相談」を知っていますか＞

「就学相談」は、子どもが安心して学校生活を送ることができるように、どのようなサポートや環境が必要かを保護者と一緒に考えていく市の事業です。専門家（就学相談員等）が就学（通常の学級、通級利用、特別支援学級、特別支援学校）や支援の方向性を検討・協議します。そして、文部科学省の判断基準に則って教育委員会が判断しています。以下は、年中児保護者全員に配付しているパンフレットです。

お子さんの学校生活や学習面にご心配のある保護者の皆様へ…

安心して学校生活を送ることができるように上越市教育委員会では、お子さんの教育や就学について、保護者の皆様と一緒に考えます。そして、学びの場を決定して行きます。これが「**就学相談**」です。

～就学相談を受けるメリット～

保護者やお子さんのメリット

入学前や入学後の不安を軽減できる

年長の早い時期から就学先と繋がり、心配な事について相談できる。

学校のメリット

お子さんのことを把握して入学後の支援に生かせる

お子さんの様子や入学後の配慮を知ることができ、早期からの支援に繋げられる。

就学相談を受けた保護者からの声

家庭や園での様子に、小学校に入学したら友達と遊んだり学習したりできるか心配でした。「就学相談」というシステムを知り、申し込みをしました。検査を通して、周りの園での生活や家庭生活の中で具体的ななかかわり方を提案してもらうことができ、とても良かったです。また、小学校の先生に、我が子のことをある程度把握してもらって入学できたことは、安心でした。

～上越市の就学相談システムについて～

年中児の冬頃～年長児の6月 就学相談は、保護者の方から各園に申し込みをお願いします。

4月～10月

◆ お子さんの様子の確認

- ・検査専門員による検査を通して、お子さんの得意な力や苦手な力に合わせた必要な支援について提案します。（月齢が5歳に達すると年中児の3月～実施する場合もあります）
- ・就学相談員（校区の小学校職員）が、園に伺うなどして、日常の場面を参観させていただきます。
- ・就学相談員と保護者とで面談をし、日頃の様子をお伺いします。

11月～12月

◆ 就学支援委員会（教育委員会、就学相談員など）で、お子さんの入学後の支援方策や就学先の判断を出します。

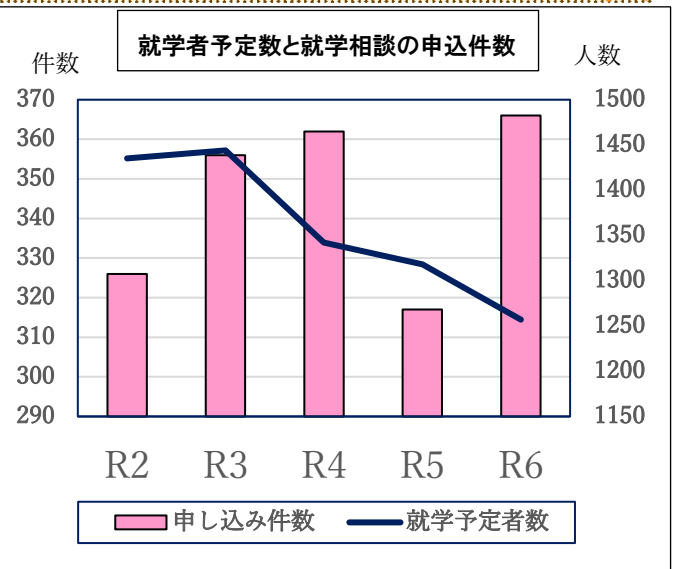
就学相談通知を保護者の方にお渡し相談します。
※保護者の同意をもって就学先が最終的に決まります。

一人一人の可能性を最大限に伸ばすための教育と支援の在り方、そのための就学先（学びの場）を保護者と共に考え、決定していきます。就学相談を希望される方は、園長または担任にご連絡ください。
入学後もお子さんの様子によって、より適切な学びの場を検討できます。

幼児の就学相談は、右のグラフのとおり、就学者予定者数は減少傾向にありますが、就学相談の申込件数は増加傾向にあります。令和6年度は、過去最多の申込数となりました。

就学相談の認知が進んできたことも増加の要因ですが、支援が必要な子どもたちが増えてきていることが一人一人の調査票から読み取れます。

特に、慎重に検討しなければならないお子さんについては、就学支援委員会（大学教授、特別支援学校校長、小・中学校長、小児科医・精神科医、こども家庭センター、こども発達支援センター、ブロック代表教諭、計30名で構成）で意見聴収し、文部



科学省の判断基準に則って判断します。

令和6年度では、学びの場の就学判断として、「特別支援学校」の判断件数は前年度の2倍、「特別支援学級」の判断件数は前年度の1.5倍、「通級利用が必要」の判断件数も前年度に比べて増えています。なお、就学判断の対象となった子どもたちの約80%は、「通常の学級」に在籍する子どもたちです。

支援が必要な子どもたちが増えていることを踏まえ、教育補助員や介護員も増員しています。

<新1年生の担任になる学級担任の先生へ ～就学相談の資料に必ず目を通してください～>

就学相談の資料には、その子の相談履歴や認知特性（苦手なことや得意なこと）など、様々な情報を記録しています。校内の特別支援教育担当者（就学相談員）が半年以上かけて調査してきた資料でもあります。

学校生活において心配される子どもの言動は、認知の特性からも把握できます。例えば、「状況を目で捉えて、判断することに弱さ」があることが就学相談資料から分かることがあります。そうすると状況や友達の気持ちを言葉で丁寧に説明する支援が有効なことが分かります。子どもの困り感を知らずに、「本人のわがまま」と捉えてしまうことは、その子の成長を妨げてしまうことにもなります。生徒指導の対応に、特別支援教育の知見は必須と言えるでしょう。

就学相談員は、3月・4月の機会を捉え、新しい担任へ確実に引継ぎを行い、担任と一緒に就学相談資料に必ず目を通し、必要な支援を準備して入学を迎えられるようにしてください。校内委員会やケース会議等において、就学相談資料に立ち返ることも大切です。



<その子の背景を知ること、声掛けや関わり方が変わってくる>

ある子が、急に黒板に殴り書きを始めた。他の子どもたちは、先生が何と言うか固唾を飲んで見守る

どの先生もこのような場面を見かけることがあるでしょう。この時にどのように本人に声を掛けるか、固唾を飲んで見守る子どもたちにどんな話をするか。皆さんだったらどうしますか。

子どもたちの言動には、必ず原因や理由があります。また、その子の背景を知っておくことで、教師の対応は変わってきます。その結果、声掛けや関わり方は、「愛」のある温かいものになるのではないのでしょうか。



<年長時に就学相談を受けた保護者からの手紙>

第1子であり、小学校に入学してから特別支援教育を受ける事に悩んでいましたが、今はあの時、小学校の早めの段階で決断し、お世話になって本当に良かったと思っています。子育てに悩んだり、周りからの目を気にしたりする保護者の方はたくさんいらっしゃると思います。私もそうでした。

でも、良い学習参加や関わり方ができるようになったこと、こんなに成長できることを多くの保護者の方にお伝えください。

この手紙は、年長児に就学相談を受けた保護者からの手紙です。子どもと保護者に寄り添い関わってきて良かったと思える手紙であり、学校と保護者との信頼関係づくりと特別支援教育に対する正しい理解の啓発が上越市で取り組まなければならない大事な課題でもあります。

その子の背景や困り感、良さや強みを、関わる職員が共通理解し、「愛」ある温かい対応を続けていくことは、子どもや保護者の安心感となり、「一人一人が生きる学校づくり」につながっていくと考えます。

（担当 特別支援教育指導主事 吉越）



「冬期カウンセリング研修講座で力量アップ！」



大勢の皆様からご参加いただき、ありがとうございました。講座及び感想を紹介します。

◆12月25日(水) 協働学習とインクルーシブ教育を支える学級の耕し～WEBQUを活用した学級づくり～

講義の要点

講師 早稲田大学

伊佐 貢一 客員教授

これからの学級づくりでは、インクルーシブ教育にもアクティブラーニングにも共にヒットする学級集団の育成が重要である。つまり多様性を包含する学級集団をつくることにより、児童生徒同士が建設的に相互作用を行うことが肝要である。

WEBQUは児童生徒が質問に答え、直接入力する。入力し終わると、瞬時に分析されて、結果が出力される。それをもとに学級づくりの計画、学級づくりシートによるPDCAの実践、事例検討会において学級担任の支援を行うことが大切である。

◇感想

WEBQUの結果の見方と活用方法について教えていただきました。多様性を受け入れる学校を構築するためには、結果を報告しあうだけでなく、職員全体で事例検討会を行うことが学級担任の活力となり、よりよい学級集団の育成が促進されると感じました。多くの先生方に広めたいと思いました。

◆12月26日(木) 不登校児童・生徒の理解と支援～学校・家庭・関係機関等との役割と連携について～

講義の要点

講師 東京家政大学

相馬 誠一 名誉教授

不登校生徒の意識調査によると、勉強や進路のことが気になる様子や「学校に行けるなら行きたい」気持ちと「そっとしておいてほしい」という相反する気持ちが見られる。また追跡調査からは、不登校により学業の遅れや進路選択上の不利益、社会的自立へのリスクが生じることが分かる。私たちは、子どもの心の叫びに気付く校内体制を整え、一人一人のアセスメントと共通理解、具体策を明確にした支援と検証、校内教育支援センター等による学習権の保障等に全力で取り組んでいかなければならない。

◇感想

不登校の現状や、小中学校で不登校になるとその後の人生にも大きく影響が生じることが分かりました。また、不登校経験者の声を知ること、子どもたちが何で困り感を感じ、何でつまづいてしまうのかが分かりました。新学期、改めて「誰が・何を・いつまでに」するのかを決め、職員やSCと相談・協力しながら当該生徒の支援を進めたいと思います。

◆12月26日(木) 学校・学級が変わる:学校規模ポジティブ行動支援

講義の要点

講師 金沢学院大学

佐田東 彰 教授

学校には、多様性のある子どもが在籍する。問題行動への事後的対応だけではなく、「ABC」分析の理論の枠組みに基づいて、望ましい行動を増やすアプローチが重要である。

SWPBSの導入は目的ではなく、学級経営・学校経営の継続的な安定における手段である。教師の役割は、子どもたちが安全に失敗したり、安全に間違えたりする経験をたくさんできる場になるよう環境設定することである。全員を対象にしたユニバーサルな第一層支援を全学級で取り組んでほしい。

◇感想

褒める・目標設定・フィードバックの効果についてデータを基に示され、納得しました。

子どもたちが「自分は肯定されている」と感じ、学校で気持ちよく過ごせるよう、大人の役割「笑顔と機嫌の良さ」のキープを心がけたいです。

QRコードを活用した参加型の講義が新鮮で、来年も参加し、学びたいです。

令和7年度カウンセリング研修予定

7月30日(水)	特別支援教育	上越教育大学	関原 真紀	准教授
7月31日(木)	学級経営	國學院大學	杉田 洋	教授
7月31日(木)	生徒指導	関西外国語大学	新井 肇	教授
8月1日(金)	教育相談	柏崎市子ども未来部子どもの発達支援課	小林 東	課長
12月25日(木)	不登校支援	FR教育臨床研究所	花輪 敏男	所長
12月26日(金)	特別支援教育	金沢学院大学	佐田東 彰	教授

※詳細については、4月上越市立教育センター「令和7年度研修案内」をご覧ください。